

もの言う手のひら

文・イラスト 中野 翠

えっ、もう二十年近く前になるの?!信じられない。ついこの間のことに思われるのに……。

ティム・バートン監督の映画『エド・ウッド』（'94年）の話です。

『エド・ウッド』は'50年代ハリウッド映画界に実在し、「史上最低の監督」とまで言われるほど異様な作品を撮り続けたエド・ウッド監督の肖像を「エドの同類」と自認するティム・バートン監督が熱烈な愛をこめて描き出したもの。エド・ウッドは晩年のベラ・ルゴシ（'30年代にボリス・カーロフと並ぶ怪奇俳優として活躍したが'50年代には忘れられた存在になっていた）に出会い、何本かのSF・怪奇映画を撮る。世間一般とはハズレたところで、二人は怪奇映画への見果てぬ夢を燃やし合う。

エド・ウッドを演じたのはジョニー・デップで、奇妙天然な人物像をみごとにこなしていた。けれども、いや、それ以上にすばらしかったのはベラ・ルゴシ役のマーティン・ランドーだった。

マーティン・ランドーと言ったら'60年代のTVムービー『スパイ大作戦』で日本でもおなじみのスターだったけれど、実はアメリカでは俳優養成のコーチとしても知られ、教え子にはあのジャック・ニコルソンがいるという程の人。

「HOME」で始まる長セリフには胸を打たれた。「故郷……。私には故郷などない。世間の人々に追われ、さげすまれて、逃れて来た。この密林こそ私の故郷。今こそ世間に思い知らせてやる。私の産み出した原子人間たちが世界を征服するのだ……」。

そんなアウトサイダーの情念が炸裂するようなセリフを、手のひらを躍らせながら語るのだ。長い長い指が妖しく、くねる。魔法使いか催眠術師のように、その指先には、魔界へと、異界へと、引きづり込んでゆく気配が充満していた。おそろしく、また、美しかった。

クサイ、と言ってもいいほどの大仰な芝居。演技者だったら一度はこんな芝居を試してみたいものではないか?と思わせる。体の動きはともなわなくても、顔と手、それだけでこんなに劇的な表現ができるというわけなのだから。マーティン・ランドーはこの演技でアカデミー助演男優賞、ゴールデングローブ賞をはじめ主要な賞を総ナメにした。うるさがたもみんな、あの手で魔術にかかってしまったのだ。

